



渦巻きの想い

(1) 芸術の慰め

今月号のパリ通信は日本からパリを思う古賀さんの名文です。ご母堂の看病の為に一時帰国された郷里からの第72号です。ご快方を祈ります。

久留米市美術館で2018年2月4日迄「生誕120年東郷青児展」が開催されていると教えて頂きました。「時代背景なしでは評価できない芸術の変遷」と結ばれていますので是非本文をお読みください。

特に東郷青児の『山の幸』と藤田嗣治の『海の幸』が展示されているとのこと。東郷青児と藤田嗣治の関係が絵によって示されることは記憶に留まります。知識は意味づけと関係性と統合性がないと深みが出ません。古賀さんの優れた一面がここにあります。

(2) 最近知ったパスカルの言葉です。

『われわれは確実に知ることも、全然無知であることもできない』

私たちの存在はじつに中途半端。世界を知ろうにも世界はあまりに複雑で、とてもその全体を理解することはできない。だがまったく知らないでいることもできない。だから世界を少しでも正確に捉えたければ、他人の考えによく耳を傾けて複眼を得るか、問題を解くための補助線を一つでも多くもつことが必要となる。17世紀の思想家の『パンセ』（前田陽一・由木康訳）から。

（朝日新聞・鷺田清一・「おりおりの言葉」から）

浅学寡聞な上に記憶力が劣っている自分に劣等感以上のものを感じている昨今ですので、この言葉に救われました。「補助線を一つでも多くもつ」と行間を深く読めることを実感しています。補助線は関係性を浮き彫りにしてくれますから記憶に留まる確率が驚くほど増加します。

学習途上にある若い人への励ましの言葉になります。特にK.B君へ祈りをこめて。

(3) 5年単位

ベートーヴェンの第九の研究者として有名な明石の藤井義正さんは「晩晴塾」を主宰され毎月50名近くの人々が神戸駅近くの会場に参集して共に学習をされています。晩晴塾とは「人生本来晩晴を重んず」「人生というのは上手に年をとって、最後の最後、最晩年を心晴れやかに過ごすことが肝心」と言われ、健康を失ったり、社会貢献の役割がなくなった後、人間的に円熟し最後の最後も、いい笑顔の心穏やかな高齢者になるにはどうすればいいかを体験的に追求されています。既に42回、宗教・心理学・詩歌・音楽等の幅広い分野から資料を集められて会員に配布されています。わたしも通信会員で心やすらぐ資料を頂いています。認知症について更に深い研究をされるということで6ヶ月間休講となりますが、80歳を過ぎても尚、衰えない研究心に頭が下がります。

私とさえもいつも消極的で自信なく眼前対応的に生きてたまたまそれが些かの社会貢献になっているという状況です。

3年前にもう500通の手紙は書かないだろうと思い住所を印刷した最後の封筒を作りました。その最後の封筒が11月の終わりに印刷会社の会長さん宛ての手紙になり、その旨を書きましたら逆に励ましを頂きもう一回発注することになりました。

後5年、500枚を依頼したところです。

10月10日は金婚記念日で子どもと孫たちとで祝い健康であることを感謝し又、よくぞここまで守られて生かされてきたと思うと何だか申し訳ないような感情が湧いてきました。

結婚式以来初めての二人で写真館に行き写真をとり、丁度パスポートの期限となっていましたので、パスポート用とマイナンバー申請用を追加して頼みました。もう海外旅行はないと以前から思っており更新しないつもりでしたが、やらなければならないことに目覚めさせられ5年の更新の手続きをしましたら、係の方から「本当に5年でいいのですか」と念を押されました「はい、それ以上、生きる」と言いそうになって慌てて「ハイ」と言っ青い色のパスポートに決めました。5年単位で考え晩晴にしたいと思います。

やらねばならないことの為に来年2月にはイスラエルに最後の旅行を計画しています。

(4) 洗うということ

心を洗い清めることは晩年になればなるほど必要な修業です。礼拝にでる、お寺参りをする、坐禅をくむと人それぞれの信条によってこととなりますが、最近食器を洗う機会が増えて感じたことは、一番汚れが落ちにくいのがご飯粒だということです。油汚れはそれなりの心構えで取り組みますからさしたる難儀はありませんが、ご飯

粒はしつこいです。粘着力があり、気をつけないと洗いそこねます。ご飯は粘りがあります。だからご飯を食べると性格にねばりが着くのでしょうか。科学的に証明する力にはありませんが、糊の原料は昔は米だったと思います。毎年新米を頂いて美味しくを大切に沢山食べられる幸せを感謝しています。両手を合わせて「いただきます」という躰は生涯忘れない習慣です。ご飯と両手でという言葉から連想しましたのが坂村真民先生の「おむすび」という詩です。おむすびは日本人の智慧の結晶で、コンビニでの主力商品ですが、やはりお母さんのおむすびに勝ものはありません。

たきたてのごはんのおむすびのうまさ
ひとつぶひとつぶがひかりかがやいて
こころやさしいひとのりょうてで
かたくもなくやわらかくもなく
うっすらとしおけをふくんでにぎられた
おむすびのおいしさ
むすびあうというそのなのよさ

原文に忠実に引用させていただきました。（自選坂村真民詩集p200）

(5)次から次へ（まわりみち）

執着力が無いのがわたしの性格の一面ですが、それは考えれば単に「忘れっぽい・飽きっぽい」ということです。ベストピアの連続性も中途半端なっており、時々自分が嫌になることがあります。見方を変えるとわたし自身に必要ながあつて変わらざるをえないようになっていてと考えて慰めています。日本の近代史をなるべく正確に知りたいと思い取り組んだ「高校生諸君」の相手である孫たちがまもなく高校を卒業してしまいます。自分の生まれた年である1941年で中断しています。これも何かのサインかも知れませんがなかなか進みません。その間に聖フランシスコの伝記やフラ・アンジェリコの受胎告知の旅が入り、これからというときに一大決心をせねばならないことに直面しました。本来やるべき方に代わってやらねばならない、おそらくその為に聖フランシスコの伝記があつたと思うようになっていました。心静かな晩晴を願って坂村真民先生の教えに従って捨てるべきものは捨てたつもりですが、何故かもどらねばならなくなりました。手元の僅かの資料を読めば読むほど次から次へと読まねばならない本が山のように出てきます。同時に生活面でも次から次へと逃げられない課題が与えられ良くない頭がパニックになっています。幸いにも加齢が限界を教えてください。「急いでも何も実らない。時間をかけよ」と励ましてくれます。年を重ねると見えないものが見えてくると賢人が仰っています

が愚なるわたしには見えるのに届かないジレンマがあります。これを克服するには努力しかありません。大学時代にゼミの教授から教わったことは「頭の悪い者は悪いなりに努力が必要だ。同じ本を5回読めば網の目は細くなる。一回目は海の水を柄杓で汲むようなものでも5回やれば歩留まりはあがる」これがわたしの信条となり本は5回読まねば理解できません。若いときは人の5倍の努力が必要でしたが今は10倍必要です。根気よく焦らずに与えられた山を登ります。健康管理との調和を考えて時間をかけて登ろうと思います。誰かに追い抜かれたらそれも仕方がないが、わたしにしか出来ないことがあると自覚していますのでこの壁は乗り越えられると確信しています。

食卓には山積みの資料を広げて、妻には「いつ片付くのですか」と質問されます。答えは「終わったとき」です。

(6)年の最後は、やはり、第九

藤井さんは上手に年をとる要諦を考えるなかの一つにベートーヴェンの第九を挙げておられます。それは合唱の日本語訳に潜む真実に迫る藤井さんの執念がこもったものです。

大概の訳は「万人よ！抱きあえ！」「この口づけを全世界に捧げよう」

となっているのですが、シラーの原文を厳密に読むと文法的にも間違っていることを指摘され「抱かれてあれ、（大いなるものに）全世界からの、この口づけを受けてあれ」と訳されています。わたしも音楽からベートーヴェンの言いたいことは藤井さんの訳だと同感しています。ここは訳によって第九を聴く意味が変わってきますので大事なところですが、一般化したものを変更するには相当のエネルギーがいります。藤井訳に導かれて年末は第九が待っています。恒例ですが今年も上野でベートーヴェンの交響曲第1番から第9番迄連続演奏会があります。指揮は今年もコバケン、第九は丁度0時に終わるように工夫されています。歓喜の新年になることを祈って聴きます。残る日々が安泰でありますように。

ベートーヴェンが残した名言

人間の最も優れたところは、苦しみを乗り越えて喜びをつかめることです。

わたしの音楽は人の役にたたなければいけない。

わたしの気高さは、ここ＝（頭・思想）と、ここ（＝胸・こころ）にある。

困難を乗り越えるたびに、いつも幸福を感じた。

自由と進歩は芸術の目標である。それは生活についてと同じだ。